

## 同窓生の近況

遺愛の卒業生は、2021年3月現在で2万5,779名います。卒業生が属する遺愛同窓会には函館支部、室蘭支部、苫小牧支部、札幌支部、弘前支部、宮城県支部、東京支部、関西支部、ハワイ支部の9つの支部があり、函館本部がまとめています。それぞれの場所で地域に根差した良き働きをしています。



10月6日は私にとって同窓生の日でした。午前中、2012年4月からこの10年間、春から秋までほぼ毎月ホワイトハウスの清掃のご奉仕をして下さってきたK7回（1955年卒業）からK20回までの同窓生9人が集まり、最後のご奉仕を下さる日でした。9人とも同窓会

函館支部の役員を経験された方々で、特に思い出に残っているのは、遺愛学院創基140周年・145周年の時にホワイトハウスでお茶会を催し、約180人の同窓生のおもてなしをしたことだそうです。また、2018年9月25日日本館改修工事に入る寸前に、本館最後の清掃に参加できたのも良い思い出になっているそうです。その様子は函館新聞に掲載されました。長い間本当に有り難うございました。

また午後には、わざわざ群馬県前橋市からK7回堤容子（旧姓：岡野）さんが、校長室を訪ねて下さり、遺愛時代の懐かしい思い出話をして下さいました。堤さんは遺愛卒業後、東京芸術大学の邦楽科に進学され、卒業後はNHKラジオ番組のオーディションに合格し、琴の演奏者として出演していたそうです。NHKスタジオでの演奏→



10月12日北海道新聞朝刊のコラム『ひと』に、堤さんが遺愛を卒業した50年後の2005年3月に遺愛女子高校を卒業し、旭川医大を出て内科医となり、3人の子育てをしながら「第64回短歌研究新人賞」を受賞したペンネーム：塚田千束（ちづか）さんの事が出ていました。

『ひと』によると、受賞作は『窓も天命』で、医師として触れた生死だけでなく、恋愛、私生活などでの思いを込めた短歌集です。選考委員からは「厳しい医療現場のドキュメントとは違う。独特の命の感触が描かれている」と評されたそうです。

塚田さんが短歌を意識し始めたのは、遺愛女子高時代の同級生で今も交流が続く友人の馬場めぐみさんが「2011年第54回短歌研究新人賞」受賞（受賞作『見つけ出したい』）したのがきっかけだったそうです。自身も短歌を作り始めたのは5年程前で、当時は仕事に加え、2人の幼い子どもの世話で心身共に疲弊していたそうです。「細切れでも自分のために時間を取ろう。」と、忙しい合間を縫って短歌に取り組みました。短歌結社「まひる野」に入会し、歌会を通じて腕を磨いているとのこと。



北海道新聞朝刊の記事

現在は旭川で、夫と2女1男の5人暮らし。こんなに忙しい中でも、年100冊ほど読む読書家だそうです。

遺愛で意識した細切れ時間の活用、10分間朝読書で培った速読力が彼女の可能性を開いているのではないかと思います。

2021年10月14日（木）